

# 少数派から多様性を考える絵本 児童書を通じての共生社会の理解

## Early education of normalization by children's book

サレジオ工業高等専門学校 デザイン学科 価値創造研究室  
中尾 研史  
指導教員 西野 隆司

キーワード：社会的マイノリティ、障害者、共生社会、絵本、教育

### 1. 研究動機

SNS など情報社会の発達により、障害を持った人などがメディアに登場する機会が増えている。しかし、その中には対等な個人としてではなく、「障害者」としての一面を切り取り、過酷さや困難に打ち克つ描写を強調するものが多く存在する。障害を持つ人も持たない人も共に歩める社会が提唱されている中で、こうしたメディアの表現は両者を意識的に隔てかねない。相手が障害を持っていても、「かわいそう」と思うのではなく個人として同等に尊重できる社会を作り出すため、メディアは社会的少数者をどのように扱うべきか、そして児童に対してどのような教育がなされるべきかを考えた。

### 2. 関連するキーワード

誰もが参加・貢献できる共生社会を目指す中で、『ノーマライゼーション』という言葉が広がりを見せており。デンマーク発祥の言葉で、日本においてこの言葉は「障害のある人が障害のない人と同等に生活し、共に活動できる社会を目指す」理念として理解されている。障害者を支える概念として浸透している「バリアフリー」や「ユニバーサルデザイン」も、このノーマライゼーションの実現のための手段である。

教育分野でもその理念が取り上げられている。『インクルーシブ教育システム』は障害のある者も無い者も共に学ぶための取り組みである。海外においては、障害児だけでなく、言語的・民族的・文化的に少数派の児童も含まれ、どんな子供も、共に学ぼうという試みがなされている。しかし、

単なる環境の共有だけでは、こうした社会的少数派にある人を適切に理解することはできず、むしろ否定的な態度を形成しかねない。その理解には幼児期からの教育が不可欠である。少数的な概念に触れた児童に、触れてはいけないタブーではなく、正しく情報を与えて常識とさせることができますその一歩である。

### 3. 調査

#### 3-1 体験型イベントへの参加

調査の一環として、新宿で開催されていた体験型イベント「ダイアログ・イン・サイレンス」に参加した。聴覚障害を持つアテンドの案内に沿って音の無い世界を体験するイベントで、1998年にドイツで初めて開催され、日本では2017年の夏に初開催された。

会場の中ではヘッドセットを着用し、言葉を話すことを禁じられる。参加者は手振り、目線、表情などからアテンドの意図を読み取り、様々なタスクに取り組む。体験をしていると、普段の自分がいかに無表情か、言葉に頼っていたか、人の表情の変化を観察していなかつたか思い知らされた。そして、他人に意図をどう伝えるか試行錯誤するうちに、アテンドの持つ「伝える能力」の高さに気づかされた。イベントのスタッフからは、社交性が高い人は、一人だけで海外旅行に行って現地で友人を作ってくるというエピソードも聞いた。相手が障害を抱えているからと言って「困っている」「助けを必要としている」と反射的に考えてしまうことは間違いでいると、話を聞きながら再認識した。参加者の中には、小学生の親子もいた。

体験終了後の参加者同士の意見交換では、実際に障礙というものに對面したこと、障礙者の生活に興味が湧いたようだった。こうした体験はよりも多くの児童が参加するべきだと強く感じた。

### 3-2 既存の書籍からの調査

『ローラのすてきな耳』という絵本では、聴覚障礙を持つローラという女の子が主人公である。絵本の中ではローラの感じる日頃苦労すること、いらいらすること、ローラに対する周囲の反応などが描かれている。最後に補聴器をもらい、自信を持つようになるというあらすじであった。

『聲の形』は、これも聴覚障礙者について扱つたもので、映画化もされた人気の漫画である。

主人公と、先天性の聴覚障礙を持つヒロインを中心に、人と人との繋がりやディスコミュニケーション、相互不理解について描く。作中には手話や筆談を用いるシーンが存在する。

## 4. 提案

社会性を身に着ける過程で児童に共生社会の視点を養わせる手段として、創作絵本を提案する。絵本は幼児教育や家庭教育において不可欠なものであり、ビジュアルを通して児童に価値観の多様性を訴えることができる。

障礙者に対する肯定的な態度の形成には、メッセージを発信するキャラクターと、受け取る側の児童が同じ社会的境遇にあることが重要であると分かった。そこで今回制作する絵本では、対象年齢として想定した5歳～7歳の児童に合わせて、小学校入学直前の児童を主人公として設定する。

話の主な流れとしては、日本にやってきたばかりの主人公が同じマンションに住む、ろうの男の子の探し物を手伝う、というストーリーとなっている。読者が親近感を覚えるであろう主人公という立場に、未だ日本では少数者である外国からの移住者を設定した。主人公は男の子が手で表現することを、手話だと知らないまま話が進む。

既存の絵本の調査などから、特に以下の点をふまえてストーリーを作成することにした。

(1) 障碍などの、個人の抱えるマイノリティは、その人の持つアイデンティティのひとつでし

かなく、最重要要素ではない

- (2) 読者が共感できるような、日常的で身近なシーンを描く
- (3) 手話や他言語の存在に興味を持つてもらえるようなページを含める
- (4) 相手の耳が聞こえないと判明した時でも、主人公は態度を変えずに自然に受け入れる

## 5. 今後の展開

今後は実際の絵本の完成を目指し、イラストの準備を進めていく。完成した絵本は実際に児童に読んでもらい、その上で簡単なアンケートを取る（絵本の感想、二人と一緒に遊んでみたいか、など）。福祉、幼児教育に関わる人物にも評価していただき、その後Webサービスを通して無料公開も考えている。

## 6. 参考文献

谷口愛・徳田克己, 1997, 「社会的マイノリティが登場する〈絵本〉の分析 I -マイノリティに関する理解促進のための幼児教育教材の分析方法の検討-」『日本保育学会大会研究論文集』日本保育学会大会準備委員会

徳田克己, 1995, 「障害理解における絵本〈さっちゃんのまほうのて〉の読み聞かせの効果 II -ハッピーエンド・ストーリーを求める子どもたち-」『日本保育学会大会研究論文集』日本保育学会大会準備委員会

渡邊健治, 2012, 『特別支援教育からインクルーシブ教育への展望』クリエイツかもがわ

文部科学省, 2016, 「外国人児童生徒等に対する教育支援に関する基礎資料」

WHILL 株式会社 HP, 2019, 「ノーマライゼーションとは何か?」(2019年10月20日取得, [https://whill.jp/column/09\\_normalization](https://whill.jp/column/09_normalization))

内閣府, 2016, 「障害者に関する世論調査（平成24年7月）の結果について」

内閣府, 2018, 「障害のある子どもの教育・育成に係る施策 平成25年版 障害者白書」